松江市史講座配布資料　2012.10.20

「ヨモツヒラサカ」を越えた神々

古代出雲歴史博物館　学芸部学芸グループ　森田　喜久男

はじめに

松江市東出雲町には、「黄泉つひら坂」と称する場所がある。そこは、「死者の国への入り口」とされている。

果たしてそうなのだろうか。本日の講演で考えてみたいことは、まさにその１点である。

１　「ヨモツヒラサカ」という言葉の意味

「ヨモツヒラサカ」という言葉は、『古事記』の神話には２回登場する。１回目は、国生みを行った男女ペアーの神々、イザナキとイザナミが訣別するシーンである。イザナミが国生みの途中で火の神を生んで、ホト（女陰）を焼き死者の国である黄泉国へ行ってしまう。あきらめきれずに黄泉国へと向かったイザナキは、そこで変わり果てた妻の姿を見て黄泉国から逃げ帰る。追いかけてきたイザナミにイザナキが別れを告げた場所が「ヨモツヒラサカ」なのである。

２回目は、オオアナムチがスサノヲの試練をパスしてオオクニヌシとなり、国作りを始めるシーンである。兄弟である八十神に何度も命を落とすような試練を与えられたオオアナムチは、オオヤビコの勧めで根の国へとおもむく。

そこでスサノヲの試練を妻のスセリビメと共に克服し、根の国から脱出する。その時に越えた場所が「ヨモツヒラサカ」であった。

ここで注意すべきことがある。それは、イザナキにせよオオアナムチ（オオクニヌシ）にせよ、「ヨモツヒラサカ」から黄泉国や根の国に「入って行った」のではなく、黄泉国や根の国から「出て行く時に越えた坂」、それが「ヨモツヒラサカ」だと言う事である。

『古事記』の神話は、そのようなメッセージを我々に発している。この事実を最初に確認しておこう。

次に、「ヨモツヒラサカ」という言葉に込められた意味について考える。

「黄泉つひら坂」とは、「平らな坂」ではない。むしろ切り立った断崖絶壁のような坂を言う。ひらは、崖という意味である。

さらに言うと…「黄泉つひら坂」は、地下である黄泉国から地上世界に斜め方向に延びている坂ではない。イザナキが逃げ帰った葦原中国と黄泉国とは実は水平な世界なのであり、その両者を分かつ大きな切り立った山のような坂が「黄泉つひら坂」なのである。

イザナキは、黄泉国を脱出して切り立った山のような「黄泉つひら坂」を越えて葦原中国に帰ってくる。ところが追手も「黄泉つひら坂」を越えて、駆け下りてイザナキのいる葦原中国に入って来ようとしているのだ。

そして、ぜひ言っておきたいことがある。「黄泉つひら坂」は、「ヨモツヒラサカ」と訓読する。一方、「黄泉国」は「ヨミノクニ」である。「黄泉つひら坂」は、「ヨミツヒラサカ」ではなく、「ヨモツヒラサカ」なのである。

これは何を意味するのか。漢字とひらがな、カタカナのどちらかが先かと問えば、漢字が先行して当たり前という事になるだろう。ただし、ひらがなやカタカナは、日本語の発音を一字ずつ文字で表記しているのだから、「黄泉つひら坂」の「黄泉」が、文字ではなく、音声の世界で、どのように発音されていたかを知る手がかりとなる。それは、神話が文字として記録される以前の段階、語り部が神話を語っていた段階の発音を知る手がかりにもなる。

以上の点を踏まえると、語り部が「ヨミツヒラサカ」ではなく「ヨモツヒラサカ」と発音していた事は大変重要である。『古事記』の原文では、「黄泉比良坂」と表記されているが、果たして、それは正しい表記だったと言えるのか。『古事記』が語り部の語りを文字化する過程で間違えた可能性もあるのではないか。

このように考えていけば、「ヨモツヒラサカ」は「黄泉つひら坂」ではなく、「四方つひら坂」であった可能性が高くなる。

とすれば、東出雲町に関係する「ヨモツヒラサカ」は、死者の国である「黄泉」へと通じている坂ではなく、根の国（地上世界である葦原中国にパワーを与える国）や海原などにも通ずる、文字通り四方に開かれた坂ではなかったか、ということになる。

これは、私が最初に発見した学説だと言いたいところだが、…すでに益田勝実氏が指摘していた。
益田勝実『同時代ライブラリー　古事記』（岩波書店　1996年）。

では、次にイザナキとオオアナムチが「ヨモツヒラサカ」を越えたという神話が意味するところは何か。考えてみよう。

まず、イザナキについて考える。そのためには、『古事記』の神話、世界の創始と死の起源の神話の立ち戻って考えなくてはならない。

2　世界の創始と死の起源

『古事記』は世界の始まりをどのように語っているのであろうか。

本文の冒頭には、「**天地初発**」とだけ書かれていて、一見すると何が何だかわからなように見えるが、その後に次々と現れる神々の名前の意味を分析することで、世界がどのように作られていったのか、おぼろげながら想像できる。

まず、冒頭の「天地初発」という言葉をどのように訓読すべきか。

これは、江戸時代以来の難問である。試みに『古事記』の注釈書、岩波書店、新潮社、小学館等々を開いてみると。学者によって、全然読み方が違う。

今のところ、有力な説としては、

「あめ　つち　はじめて　おこりしとき…」、
「あめ　つち　はじめて　ひらけしとき…」、
「あめ　つち　はじめて　あらはれしとき…」

の三通りの案が提示されている。

いずれにしても、『古事記』の神話では、天と地がどのように分離したかについては語られていない。天と地を覆っている霧や闇のようなものが晴れて、いきなり天と地が姿をあらわしたイメージである

では、その後、どのようにして世界が作られていくのか？

『古事記』の冒頭において出現した神々は、男女ペアーの形ではなく、**独神**として現れる。

独神とは、男でも女でもない。これらの神々を**別天つ神**と言う。

以下、この別天つ神の神名とその神名に込められた意味を列挙しておこう。

※神名に込められた意味については、原則として、西宮一民「神名釈義」（新潮日本古典　集成『古事記』新潮社　一九七九年）によっている。

・アメノミナカヌシ…高天原の神聖な中央に位置する主君
・タカミムスヒ…高く神聖な生成の霊力
・カムムスヒ…神々しく神聖な生成の霊力
・ウマシアシカビヒコヂ…立派な葦の芽の男性。
・アメノトコタチ…天空に永久に立ち続ける神

次に姿を現した神々のうち、最初の二柱は独神だが、その後に男女ペアーの神々が出現する。以下の神々の時代を**神世七代**と言う。それらの神々の名前も列挙しておこう。

Ⅰ　クニノトコタチ…国土に永久に立ち続ける神
Ⅱ　トヨクモノ…豊かな実りを約束する雨をもたらす雲が覆う原野の神
Ⅲ　ウヒヂニ…最初の泥土の男神
Ⅲ　スヒチニ…砂と泥土の男神
Ⅳ　ツノグヒ…角状の棒杙（ぼうくい）の男神
Ⅳ　イクグヒ…活き活きとした棒杙の女神
Ⅴ　オホトノヂ…偉大な門口にいる父親の神
Ⅴ　オホトノベ…偉大な門口にいる女神
Ⅵ　オモダル…顔つきが満ち足りた男神
Ⅵ　アヤカシコネ…恐れ多い女神
Ⅶ　イザナキ…国生みのための媾合（まぐわい）に誘う男神
Ⅶ　イザナミ…国生みのための媾合に誘う女神

これらの神々が次々と高天原に出現したことは何を意味しているのか？

おそらく、次のような出来事を『古事記』は神名を列挙することで表現したのだと思われる。

まず、最初に天と地が姿を現して…
↓
高天原の神聖な中央に主が出現する
↓
生成の霊力が出現する
↓
漂っている国土から天に向かって葦が勢いよく伸びる
↓
天空と国土が固定化される
↓
国土の原野を雲が覆う
↓
雲に覆われた原野から
↓
泥土による盛り土が出来て…
↓
棒杙によって境界が形成され…
↓
門棒が出来て、その中に守られるべき住居が出来る
↓
そして男神と女神とが出現し、それがどんどん若返って…
↓
今まさに両者により国生みの前提としての媾合が開始されようとしている…。

一見すると難しい漢字が並んでいる『古事記』冒頭の神名は、実は国土創世の様々な場面をフラッシュバックのように散りばめたもの。

『古事記』の原文では、これらの神々は、すべて「**成る**」という言葉で表現されている。これに対し、イザナキとイザナミの媾合によって登場する神々はすべて「**生む**」といった言葉で表現されている。

さて、この神世七代の最後に出てくる男女ペアーの神々がイザナキとイザナミである。

この二神に対して、別天ツ神達から、「漂っている国を、しっかりとした状態に作り固めなさい」という命令が下る。

イザナキとイザナミが「国生み」を行うまでは、大地は、まだ浮いた脂のごとく漂っており、ドロドロとした状態。

では、そのような状態から何が生まれたのか。

イザナキとイザナミの二神は、別天ツ神達から、「天の沼矛」と呼ばれる「玉で飾り立てられた矛」を授けられて、「天の浮橋」の上に立つ。

「天の浮橋」とは、天と地上との間に文字通り浮いている橋。イメージとしては、虹あるいは宇宙ステーション、それとも宮崎アニメのラピュタのような感じ。

そこに二神は立って、ドロドロとした地上に向かって、矛を掻き回す。

すると、したたり落ちた塩が、凝り固まってオノゴロ島ができた。オノゴロ島とは、「自ずから凝り固まった島」という意味である。

二神はオノゴロ島に降りたって、ここでマグワヒを行う。このマグワヒという言葉は、「目交ひ」とも表記される言葉である。「目と目を交わしあって情を通ずる」といった意味であり、そこには何ら淫靡な響きはない。

神話の世界における男神と女神との交わりとは、具体的には以下のようなプロセスをたどる。

①お互いの身体を確かめ合う。…「あなたの体はどのようにできているか？」
②「天の御柱」を男神が右側から、女神が左側からまわる。
③出会って愛の唱和を行い、一体化する。…「まあ、なんて素敵な男だこと！」

『古事記』の神話においては、マグワヒは生殖行為のための神聖な「儀礼」と認識されていた。その点を確認した上でさらに注意すべき点がある。『古事記』では、あくまでもマグワヒの主導権は男側にあるかのような書き方をしている。

たとえば、愛の唱和の部分。ここで、それは女神であるイザナミから発せられた。その直後、男神であるイザナキは「女から先に声をかけるのは良くない」と述べている。

『古事記』では、その結果、生まれた子が、足腰の立たない水蛭子と淡島であった。こうなった原因は、女神から声をかけたせいだと別天ッ神達に判定されて、二神はマグワヒをやりなおす。今度は愛の唱和を男神であるイザナキから始める事になる。今度はうまくいった。

でも、これはあくまでも『古事記』の論理なのである。

実際の古代社会ではどうであったか？先に女の方から、男の方へ愛の告白をすることもあったかも知れない。

二神が最初に生んだのは島々である。それを順番に記すと以下のようになる。

①淡路島　②四国の国々　③西ノ島・知夫里島・中ノ島　④九州の国々
⑤壱岐　⑥対馬　⑦佐渡島　⑧大倭豊秋津島（本州の大半？）

以上①～⑧を総称して「大八島国」と言う。これらの島や国は、たとえば、伊予国（現在の愛媛県）のことを、『古事記』では「愛比売」という女神の名で表現している。島々にもそれぞれ名前があって、それが男神の名であったり、女神の名であったりしている。

島生みの後は、神生みである。文化に関わる神々と自然に関わる神々がイザナキとイザナミによって生まれた。

①建物の神々　②海と河口の神々　③水の動きを司る神々　④風・木・山・野の神々
⑤山頂・原野・霧・峡谷・迷路の神々

古代人は、自然現象や身の回りのさまざまな物にすべて神々がやどっていると考えた。たとえば、水面に波が立ってやがて静まっていく…。そういった変化は、それぞれにアワナキ、アワナミといった神々の仕業と考えられていたのである。

イザナミは、火の神を生んでホトを焼き、死に至る。この火の神の名前は、ヒノヤギハヤヲ（＝ヒノガガビコまたはヒノカグツチ）と言う。

イザナミが火の神を生んでホトを焼き臥せってからも多くの神々が生まれた。それは、イザナミの嘔吐、糞、尿などから生じた神々である。ちなみに出雲の製鉄神として知られるカナヤマヒコ・カナヤマヒメは、イザナミの嘔吐から生じた。

女性器を意味するホトという古語には、マグワヒ同様、何ら淫靡な意味はない。それは、「秀でた処」とか「素晴らしい処」という意味が込められている。古代人は、そこが「生命の宿る処」であると考えていたのであろう。

イザナミが死ぬと、イザナキはイザナミの枕元で腹ばいになり、次にイザナミの足元で腹ばいになって大声で泣く。この所作は、古墳時代に行われていたモガリという葬送儀礼を反映したものである。

国生み神話に貫かれた『古事記』の論理、「女から愛を語ってはいけない」ということ、それ自体は、男性上位で家父長制の論理なのであるが、その一方で、国生み神話の中には、命の尊さといったメッセージも込められている。

『古事記』によると、イザナミは出雲国と伯伎国の境の比婆山に葬られたと書かれている。

イザナミの葬られた場所については、地元において近世以降、いろいろな説がある。

主な候補地としては、
①佐陀山（鹿島町）、②熊野山（八雲村）、③御崎山古墳（松江市大草町）
④いざなみの尊御陵（八雲村日吉神納）、⑤御墓山古墳（奥出雲町横田と安来市広瀬　　町との境）、⑥比婆山御陵古墳（安来市伯太町横屋）、⑦猿政山（奥出雲町仁多）、　　⑧灰火山（奥出雲町横田大馬木）。

このうち、いざなみの尊御陵は、「岩坂陵墓参考地」として宮内庁の管理下に置かれ、一般の立ち入りは禁止されている。

イザナミは、黄泉国へと行ってしまった。イザナキは、イザナミをひと目見ようと黄泉国に追いかけて行く。そしてイザナミが黄泉の国の御殿の扉を開けて出迎えた時に、帰ってきてくれと頼んだのだが、イザナミは、自分は黄泉国の食物を口にしてしまったと答える。

黄泉国の食物を口にしてしまったら何故帰れないのか。『古事記』の原文では、この部分は「黄泉つ戸

喫」と書かれている。

「黄泉つ戸喫」とは、黄泉国のかまどで煮た食べ物を食べること。それは黄泉の国の一員になってしまったことを意味する。だから帰りたくても帰れない。

それでもイザナミは、帰れるかどうか黄泉国の神様に掛け合って見るといって黄泉国の御殿に入ったまま出て来ない。

「決して中をのぞかないで」とイザナミに言われていたイザナキだったが、待っていられなくなり、左のみづらに刺してあった櫛の歯を一つ折って、それに火を灯し、イザナミのいる暗い御殿の中に入って行く。

この櫛について、『古事記』の原文には「ゆつつま櫛」と書かれている。これは、神聖な櫛という意味である。具体的には竹製の竪櫛。櫛は、神話において呪術的な道具として使われ、邪悪なものを斥けるものと考えられていた。

そのような櫛の歯に火を灯してクラ～イ闇夜の中でイザナキが見たものは…、変わり果てたイザナミの姿であった。暗闇の中に横たわったイザナミの体には、うじ虫がたかっており、頭・胸・腹・ホト・左の手、右の手、左の足、右の足にあわせて八つの雷の神がいた。

ここで問題となるのは、イザナミの体にたかっていたウジである。実は、この部分、『古事記』の原文では、「蛆たかれ、ころろきて」と書かれている。

この部分は、これまでは、「蛆がたかってごろごろと音を立てていた」と解釈されてきたが、近年の研究成果によれば、「ころろく」という言葉には「ころがる」という意味があることがわかってきた。

「蛆たかれ、ころろきて」は、「蛆が食物の上を旋回しながら食い込んでいく」という意味である。

なお、このシーンについては、死体が腐乱していく様子を象徴的に描いたもので、横穴式石室の古墳に死者を追葬する際に、一度埋葬した遺体に再会した恐怖を題材にしたという説や古墳時代の葬儀の中で、長期間にわたって殯宮（喪屋）に安置されている遺体がどんどん腐乱していく場面を題材にしたという説が有力である。

さて、変わり果てたイザナミの姿にイザナキが恐れおののき、黄泉の国から逃げ出すと、それに気がついたイザナミは「私に恥をかかせたなぁ～」と言って、ヨモツシコメに後を追わせた。

このヨモツシコメは、「黄泉国のパワフルな女」という意味である。シコメは漢字で書くと醜女と表記されるので、醜い女というイメージでとらえられがちだが、それはあくまでも現代人の感覚である。シコメのシコという言葉には活力という意味が込められている。

イザナキが逃げながら頭に巻いていたクロミカズラを投げると、地面に落ちてエビカズラの木が生えた。シコメがその実を拾って食べている隙にイザナキはまた逃げた。しかし、シコメは、食い終わるとまた追いかけてくる。そこでイザナキが今度は、右のミズラに刺していたユツツマの櫛の歯を折取って投げると、たけのこがはえ、女がそれを抜いて食べている間にまた逃げた。

そこで、イザナミは、自分の体にいた雷神達に沢山の黄泉の国の軍勢をつけて追いかけさせた。イザナキは、剣を抜いて体の後ろで振りながら逃げました。しかし、まだ追いかけてきるので、「黄泉つひら坂」のふもとに来たときに、そこに生えていた桃の実を三つ取り、待ちかまえて投げつけたところ、追手は黄泉の国に戻っていった。

桃は、邪気を払う果物として重視された。古代の祭祀遺跡からは、桃の実がしばしば出土している。

島根県では松江市八雲町前田遺跡、出雲市青木遺跡などから出ている。なお、江戸時代の享保２（1717）年に書かれた『雲陽誌』によれば、意宇郡東岩坂（八雲町岩坂）に小麻加理利坂という坂があって、イザナキがここで桃の木の下に隠れながら、桃の実を雷の神に投げつけた伝承が残されていたようである。

とうとう、最後にイザナミ自身が追いかけてきた。そこで、イザナキは、千人で引くほどの重い大きな岩を「黄泉つひら坂」の麓に置き、その岩を間に置いて向かい合って立った。

そこで、二人の神々は訣別する。イザナミが、「あなたの国の人草を１日１０００人くびり殺す」と言い放つと、イザナキは「それなら私は１日１５００の産屋を建てる！」と応酬する。

この後で、『古事記』は、「こういうわけで、一日に必ず千人死に、千五百人が生まれるようになったのです」という具合にこの話を締めくくる。

この部分は、イザナキとイザナミとの訣別を物語るだけではなく、人は何故死ぬのか、死者と生者はどうして共に暮らしていけないのかといった事を語った神話だ。

３　オオアナムチからオオクニヌシへ

次に、イザナキと並んで「ヨモツヒラサカ」を越えオオアナムチという神に焦点を当ててみよう。

オオアナムチは、出雲大社に祭られているオオクニヌシの事である。この神は、最初、兄弟に命を落とすような試練を何度も与えられ、スサノヲを頼って根の国へと向かう。

ここでも数々の試練を受けるが、それらをことごとくパスしてスサノヲの娘スセリビメを連れて、「根の国」から脱出、「ヨモツヒラサカ」を越えて、葦原中国に戻り、オオクニヌシとなって国作りを始めるのである。

この神話の意味するところは何か、考えてみよう。オオクニヌシは出雲大社に祭られている神だが、『古事記』によると５つの名前を持っている。

・オオアナムチノカミ（大穴牟遅神）…偉大なる鉱山の貴人
・アシハラノシコヲノカミ（葦原色許男神）…地上の現実の世界にいる醜い男
・オオクニヌシノカミ（大国主神）…偉大なるクニヌシ（国主）
・ウツシクニタマノカミ（宇都志国玉神）…現実の国土の神霊
・ヤチホコノカミ（八千矛神）…たくさんの矛を持つ神

『日本書紀』の異伝によれば、これに更にオオクニタマノカミ（大国玉神）、オオモ　ノヌシノカミ（大

物主神）の神名が別名として加わる。

ではなぜ、オオクニヌシには、たくさんの名前があるのだろうか。それはオオクニヌシの神話の内容と深く関わってくる。ここで、オオクニヌシ神話の概要を確認しておくと、

①イナバノシロウサギ（稲羽の素兎）を助けてヤカミヒメ（八上比売）を得る。
②八十神による迫害。
③根の国訪問・スサノヲから与えられる試練
④コシ（高志）国のヌナカワヒメ（沼河比売）との愛の交歓
⑤スクナビコナノカミ（少名毘古那神）との国作り

実は上記の５つの神話に応じて、５つの神名が登場するのである。

『古事記』はオオクニヌシ神話の冒頭部分について、以下のように記す。

かれ、この大国主の神の兄弟八十神坐しき。しかれども、みな国は大国主の神に避り　まつりき。避りまつりしゆゑは…

オオクニヌシには、多くの兄弟の神々がいたが、彼らは国をオオクニヌシの譲った。そのわけは…といった形で『古事記』はオオクニヌシ神話をスタートさせています。オオクニヌシ神話は、オオアナムチが幾多の試練を経てオオクニヌシへと成長していく過程を語ったもの。

なお、オオクニヌシのモデルとして、弥生時代から古墳時代にかけて各地にクニヌシ（国主）と呼ばれる有力者が存在した可能性がある。このクニヌシが、ヤマト王権の支配下に入り、地方官に任命されるとクニノミヤツコ（国造）となる。

クニヌシという言葉は、おそらくヤマト王権あるいはそれ以前の段階で用いられていた支配者（＝王）を意味する和語です。ちなみに「王」という言葉は中国から入ってきた言葉です。オオクニヌシという神名には、葦原中国の偉大なる支配者という意味が込められている。

では、これからオオクニヌシ神話を読み進めていこう。

ある時、オオアナムチの兄弟神である八十神（＝たくさんの神々）が稲羽国（＝因幡国、現鳥取県）のヤカミヒメ（八上比売）に求婚しようとして、稲羽へと向かっていた。その時、八十神は、オオアナムチを、従者として袋をかつがせて連れていった。

一行が気多の岬（鳥取県鳥取市白兎海岸）に着いたとき、毛皮を丸はぎにされたウサギが伏せっていた。そこで、八十神は、「お前の体を治すには、海水を浴びて、風通しのよい高い山の尾根の上に伏せっているとよい」と言った。

ウサギがその通りにすると、体に付着した塩が乾くにつれて、その体の皮膚はすっかり風にさらされてひび割れてしまった。痛さのあまり、泣き伏せっていると、重い袋を背負って最後にやって来たオオアナムチが、ウサギから事情を聞いて、「すぐに水門（＝河が海に注ぐ所、河口）へ行って、真水で体を洗い、水門に生えているガマの花を取ってきて、それらを敷き散らした上に転がりなさい。そうすれば、膚はも

とに戻るだろう」と言った。

ウサギがオオアナムチに言われた通りにすると、元の体に戻った。そこで、ウサギは、オオアナムチに予言をする。「八十神は、ヤカミヒメを得る事は出来ないでしょう。袋を背負っていても、あなたがヤカミヒメを得る事になるのです」

ここまで確認してきたストーリーはよく知られている内容で、何を今さら…とお思いになった方もおられたかと思うが、実は基本的なところで、誤解されていることが多い。

まず、ウサギである。これはシロウサギと呼ばれているわけだが、白い兎という意味ではない。この部分、『古事記』の原文では、「素兎」という漢字が使われている。「白兎」ではなく、「素兎」であることに注意する必要がある。その意味するところは、「毛皮を剥がされた赤裸のウサギ」という意味。

次に、オオアナムチがウサギに示した治療法だが、この部分、多くの書物では、ガマの穂を取ってきて敷き詰めた上にウサギが横たわったら、ウサギの体が白くなったという意味で説明されていることが多い。これも実は正しい理解ではない。

『古事記』の原文では、治療のためにオオアナムチが取ってこさせた薬は、「蒲の穂」ではなく、「蒲黄」と書かれている。この「蒲黄」とは、ガマの花粉のことなのだ。その花粉が黄色なので、『古事記』の原文では、「蒲黄」と書かれ、ガマノハナと訓読されている。この「蒲黄」は、血を止める効能がある。

『古事記』の原文を忠実に読み解く限り、ウサギは、ガマの穂によって白い毛に戻ったのではなく、ガマの黄色い花粉の止血作用によって皮膚の損傷が治癒したという形が、本来のあり方なのだ。

ところで、ウサギは、どうして毛皮を剥がされた状態だったのだろうか。これについて、『古事記』に書かれたストーリーを再度確認しておこう。

このウサギはもともと「淤岐島」（白兎海岸の沖合にある島？）に住んでいた。そこから稲羽へ渡ろうとしたのだが、その手段がない。そこで海のワニを欺いて、「私の同族とお前の同族のどちらが多いか比べてみよう。お前は、お前の同族のありたっけを全部連れてきて淤岐島から気多岬までずらりと並べて伏せているがいい。そうしたら私がその上を踏み飛びながら数え渡ろう。こうすれば私の同族とお前の同族のどちらが多いかわかるだろう」

ウサギがそのように言うものだから、ワニは、その通りに「淤岐島」から気多岬まで並んで伏せっていた。ウサギは、その上をぴょんぴょんと飛んで最後に「お前は私にだまされた！」とつい言ってしまった。ところがウサギがそう言い終わるやいなや、一番端にいたワニがウサギを捕らえて皮を剥いでしまった。

このワニだが、は虫類のワニではなく、サメと見る説が有力。日本海沿岸の弥生時代の遺跡からはワニを描いたものが出土している。

たとえば、鳥取県の青谷上寺地遺跡からは、サメを描いた出土品として、土器の甕（かめ）の肩の所に大きく堂々と描かれたサメや木製の箱板に何匹も泳いでいるように描かれたサメの絵がある。この他、サメの背骨を加工して穴をあけたペンダントも出土している。このようにサメは、古代人にとって身近な存在だった。